

編集後記 水を運ぶ人

アヴニール労務事務所 所長 柿野元博
http://www.avenir-sr.jp
E-Mail avenir4you@gmail.com

鉄人 28 号は巨大ロボットの元祖であり、神戸出身の漫画家・**横山光輝氏**の代表作です。小学生の頃、「漫画博士」と異名（笑）

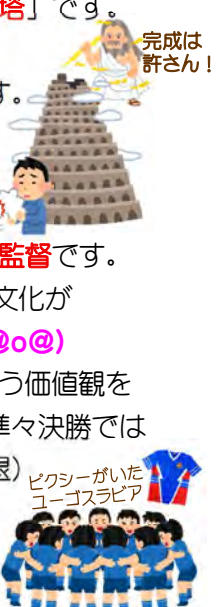
をとった僕は、横山作品の中でも特に『**バビル2世**』と『**魔法使いサリー**』のアニメに夢中でした。『バビル2世』の主題歌は今でも歌えます！ホントに歌ったらきっと引かれちゃうけどねー。(^^)



さて、そのバビル2世が住んでいたのは、旧約聖書の中では未完に終わったはずの「**バビ(ベル)の塔**」です。天まで届く塔を建てようとした人々の壮大な野望は、なぜ潰えたのかご存じでしょうか。旧約聖書は、人間の傲慢さが神の怒りに触れ、一つだった言葉をバラバラにされた為と記しています。言葉が通じずコミュニケーションが取れなくては、大きな事業は決して成し遂げられないもの。案の定、塔の工事は頓挫してしまったのです。(>_<)



サッカーW杯において、この難題に向き合い歴史に名を刻んだ名将がいます。**イビチャ・オシム監督**です。彼が率いた当時の**ユーゴスラビア代表**は、「**5つの民族、4つの言語、3つの宗教**」を内包し複数の文化が入り混じる、あたかも未完に終わったバベルの塔のように**空中分解の危機を孕んだ集団**でした。(@o@)しかしオシム監督は、徹底した対話を通じて「勝利」という命題と「そのために何が必要か」という価値観を共有し、多様な選手たちをまとめ上げます。臨んだ1990年のイタリアW杯ではベスト8に進出。準々決勝では一人少ない状況でマラドーナ率いる優勝候補アルゼンチンと互角に戦いました。(最後PK戦で敗退)その大会で優勝した西ドイツの主将マテウスが、「ユーゴが最強のチームだ」と評したほどです。そのユーゴスラビアは翌1991年から内戦を経て崩壊を始め、現在は7つの国家に分裂しています。



その後、オシム監督は日本のジェフ市原の監督に就任し当時弱小だったチームを変えていきました。ある試合後の会見でのことです。決定機を逃した選手への意地悪い質問に対し、監督はこう返しました。**「シュートは外れる時もある。それよりもあの時間帯に、ボランチがあそこまで走っていたことをなぜ褒めてあげないのか」**



オシム監督が価値観を言語化し共有した言葉に「**水を運ぶ人**」があります。そこに当たり前のように「水」があるから人は生活できる。自分で点は取れずとも、仲間のために献身的に走る選手。それが「水を運ぶ人」です。彼はそんなスポットライトが当たらない黒子となる動きをしっかりと評価しました。役割の尊さが言語化され共有されたことで、選手たちは互いをリスペクトし、強固な結束力を持つ強豪へと変貌を遂げたのです。

これは会社組織に当てはめると、点を取るストライカーが「営業」、「水を運ぶ人」はそのまわりでサポートしてくれる同僚や先輩、あるいは総務や経理といったバックオフィスの社員たち。そうした「水を運ぶ人」の「献身性」があってこそ、前線に立つ営業は受注を取れます。「水を運ぶ」意識を持った人が増えればチームは強くなり、会社も強くなると思うのです。

そのためにはまず、社内にいる「水を運ぶ」仲間の存在に気づくことです。誰かが準備した会議資料、整頓された備品、見えない気配り、毎月の経理処理や給与計算。そうした日常の「水を運ぶ」仕事に、意識して「**ありがとう**」と声をかけてください。その**感謝と承認という小さなコミュニケーションの積み重ね**が、決して崩れない強靱な「会社」という塔を築く第一歩になるように思います。(^_^)v



今年度の最低賃金の審議がスタートしています。史上最大の上げ幅となった昨年以上の上げ幅になると予想されています。燃料費や資材費等の高騰と合わせ、企業の収益に大きく影響することは間違いありません。改めて「**収益**」という**企業の命題**を経営者と社員が共有し、その為には何をすべきか皆で考える時ではないでしょうか。

6月に開催されるサッカーW杯のメンバーが先日発表されました。現在の日本サッカーの土台を築いたオシム元監督が説いた「水を運ぶ」プレースタイルを身上とする、ベテラン長友佑都選手が選ばれました。無尽蔵の運動量を誇る長友選手もまた「**鉄人**」と親しみをもって呼ばれる選手です。きっとピッチ内・外の全てでチームに元気を与えてくれることでしょう。日本代表と「鉄人」長友選手を応援したいと思っています!(^_-)☆

